

平成26年度 第2回鳥取環境大学教育研究審議会 議事要旨

- 日 時 平成26年6月23日(月) 10:00～11:50
- 場 所 鳥取環境大学 大会議室(本部講義棟3階)
- 出席者 高橋一委員、小林楨太郎委員、岡田昭明委員、富岡庄一委員、岡崎誠委員、
今井正和委員、千葉雄二委員
角紀代恵委員、木下法広委員、田中仁成委員、常田禮孝委員、中島廣光委員、
山本仁志委員
[13名/15名]
- 欠席者 三野徹委員、田中勝委員

【議事】

1 前回議事要旨の確認

原案のとおり了承。

2 報告事項

(1) 近況報告

資料に基づき、在籍者状況、就職活動状況、その他の近況について報告があった。

主な意見等は次のとおり(○:質問・意見、→:回答・説明 以下同様)。

○入試広報関係の高校内ガイダンスはどういう形で開催するのか。業者のいいなりでなく、ある程度対象を取捨選択するほうがいいのではないか。

→高校と大学の間には業者が入っているが、対象の絞り込みは大学側で行っている。

○学内特別研究費助成はどういう形で決定されるのか。成果の追跡はどうなっているか。

→申請書を、採点して決定している。制度が始まって3年目なのでそろそろ成果が出てくると考えている。

○学生の資格取得講座で環境関連のものは準備していないのか。

→eco検定や、環境測量士などは、学内の教員で対応している。

(2) 平成25年度決算について

資料に基づき、報告があった。

主な意見等は次のとおり。

○教育経費も予算に対してずいぶん決算額が減少している。少なければいいというのではなくて、教育内容を充実させることも大学の使命であることを考慮してほしい。

3 審議事項

(1) 平成25年度業務実績について

資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

主な意見等は次のとおり。

○評価の枠組みがどうなっているのか。4点が多く、5点も見られる。通常、業務が順調であれば3点、特別よければ4点、研究系の独立行政法人であればノーベル賞クラスの成果があったときに5点といった感覚である。

→確かに甘い評価と感じているが、設置者側の基準に基づいて実施しており、その評価基準が甘いということになる。数値目標があるものは達成割合によって、点が決まる仕組みになっており、自己点検において3.6以上なければ不適合という基準を考えてもらえば、3.85の評点も特別甘い点数ではないと考えている。

○ホームページ等にも公開されるものだと思うし、評価が甘いといわれるのは報われない気がする。項目も多すぎるのでもう少しシンプルであればとも思う。

○退学率が目標より高くなっているが、どういう理由によるものか。退学理由が経済状況なのか、メンタル面なのか、きめ細かくフォローするのが重要ではないか。

→私立の時代と公立化後では状況も変わってきている。メンタルを理由とする退学は減少し、就職や経済上の理由で退学する学生が増加している傾向にある。

○県内高校の卒業生の入学者が少ないが、進路担当教諭の反応はどうか。

→県内高校からの志願者も増えているが、まだ様子見のところはある。引き続き県内高校へのPRも必要と考えているが、公立化後は大学に対する受け止め方が好意的になった印象は感じている。

○高校側は、公立化後の学生の就職を見ていると思う。企業では、成績だけでなくコミュニケーション能力の高い学生を求めているし、地域に活力を生み出すためにも、鳥取に新しい付加価値を与えられるような学生が求められている。再来年の卒業後の出口で、学生がよい進路を見つけられるよう努力してほしい。

→大学としてもプロジェクト研究などを通じて学生がコミュニケーション能力を付けられる授業を意識している。

→公立化後の卒業生の就職先は、その後の入学者に大きく影響することは承知している。各地に企業開拓参与を配置し企業とのパイプをつないでいくこと、就職指導講師によるマンツーマンの学生指導等を充実させていきたい。

(2) 学長選考会議委員の選任について

学長退席後、小林委員に議長交代し、審議。各委員が、学外委員少なくとも1名を含む3名を選び投票する方法により、多数決による学長選考会議委員の選出を行うこととなった。

学長を除く教育研究審議会出席委員の13名で投票の結果、

1位 岡田委員、2位小林委員、3位中島委員（学外）の3名が学長選考会議委員に選任された。

4 その他

(1) 平成26年度公立大学法人鳥取環境大学教育研究審議会開催日程について

事務局から、資料に基づき説明があった。